

超常現象には絶対法則があった

1992年 KKロングセラーズ

猪股 修二 (いのまた しゅうじ)

電気通信大卒。工学博士。マサチューセッツ工科大学客員研究員。電子技術総合研究所主任研究官。日本意識工学会会長。

現在、猪股理論は世界の物理学者から注目されている。アインシュタインの一般相対性理論を越えるものとして評価されつつある。

複素電磁場理論

ニュートン以来構築されてきたいまの物理学は、「物質」と「エネルギー」の二つを土台にして発展してきたものであり、人間の意識をはじめとするアニミズム的な“意識”を排除してきた。

もっとも、ニュートン自身は彼の著作『プリンキピア』で、重力の原因について、「宇宙に存在する『神』が重力をコントロール」しているというような言いかたで、“隠れた性質”すなわち“汎心論的意識”というような存在を考えていたようである。

それでも彼は重力があるということを、証明できない公理として提示したのである。

ニュートンはつぎのように述べている。

「これまで天空とわれわれの海で起こる諸現象を重力によって説明してきたのですが、重力の原因を指定することはしませんでした。事実この力はある原因から生ぜられるものです。……(中略)……そして重力が現実に存在し、わたくしたちの前に開かれたその法則に従って作用し、天体とわたくしたちの海に起こるあらゆる運動を与えるならば、それで十分なのです」(『自然哲学の数学的諸原理』)

本来、物理学の理論の再構築は、その理論が立入禁止、つまり、もうこれ以上の理屈はわからないけれど、とにかく現象としてあるのだ、としている“公理的な実験事実”へメスが入れられたときか、その理論への反証例として、これまでの理論に矛盾した実験事実が見出されたときにはじまるわけである。

たとえば、現在の電磁気学の体系では、摩擦電気の発生現象は、“立入禁止”的実験事実、つまりその現象の起こる理由はわからないとされている。

また、“触媒現象”についても同様なのである。

そこで、摩擦電気や電磁場の“時間触媒”現象を電磁気学の枠組みに組込むために、“複素電磁場理論”が登場してくるわけである。

この理論ではまず電界E、磁界Hがつぎのように複素数のかたちで示される。

$$\left\{ \begin{array}{l} E = E_1 + iE_2 \\ H = H_1 + iH_2 \end{array} \right.$$

iは中学の数学の時間ですでにご承知だと思うが、虚数である。

虚数とは $\sqrt{-1}$ であり、2乗するとマイナス1になる虚数単位である。そして複素数

とは虚数と実数が混じった数のことという。

この式で、 E_1 、 H_1 はそれぞれ実の電場、磁場を示し、 E_2 、 H_2 はそれぞれ非存在の「影の電場」「影の磁場」を示す。

今日の電磁気学の基本方程式でファラデーらの実験結果を統合したマックスウェルという人の考えた方程式がある。テレビやラジオなどの電磁波は、その方程式から、存在が予想されていたのである。

そして、その式に先ほどの虚数を導入した複素数を組みこむとつぎのようになる。

$$\left\{ \begin{array}{l} \nabla \cdot E_1 = 4\pi\rho_e \\ \nabla \cdot H_1 = 0 \end{array} \right. \quad \left. \begin{array}{l} \nabla \times E_1 = (-) \frac{1}{c} \frac{\partial H_1}{\partial t} \\ \nabla \times H_1 = \frac{1}{c} \frac{\partial E_1}{\partial t} + \frac{4\pi}{c} J_e \end{array} \right.$$

$$\left\{ \begin{array}{l} \nabla \cdot (iH_2) = 4\pi i\rho_m \\ \nabla \cdot (iE_2) = 0 \end{array} \right. \quad \left. \begin{array}{l} \nabla \times (iH_2) = \frac{1}{c} \frac{\partial (iE_2)}{\partial t} \\ \nabla \times (iE_2) = (-) \frac{1}{c} \frac{\partial (iH_2)}{\partial t} + \frac{4\pi}{c} iJ_m \end{array} \right.$$

これこそがあらゆる超常現象を解く鍵となる基本方程式である、複素電磁場方程式なのである。cは光速、tは時間、 $i\rho_m$ は影の磁気単極、 iJ_m は影の磁流を示している。

影の電磁場理論

この複素電磁場方程式から、“影の電磁場”的存在が予想されるのである。そして、上側の“実”的式と下側の“影”的式をくらべていただければわかるが、電場と磁場の役割がそれぞれ入れかわっており、時間の符号もプラスとマイナスが反対になっている。

実の電磁場と影の電磁場を整理すると次頁の表のようになる。

この表に少し説明を加えると、実の電場 E_1 は、非存在の磁場*H₂*をともない、実の磁場*H₁*は非存在の電場をともなうことになる。

さらに、実の電気単極は存在するが、磁気単極は実の物理的実体としては存在せず、非存在の磁気電極*iρ_m*という形で機能しているのである。

磁気単極は、このように非存在として機能していたので、これまで物理学者たちがいくら磁気単極をさがしても発見できなかったわけだ。

また、実の電流*J_e*は非存在の磁流*iJ_m*をともなう。

ファラデーの電磁誘導と鏡像関係にある磁電誘導は、摩擦電気の発生過程と考えられる。これまで摩擦電気がなぜ発生するかは、わかっていないかったのだが、この複素電磁場理論によって解明できたのである。

つまり、摩擦電気が発生するのは、“影の電磁場”がかき乱されることによって、“実の電磁場”的領域に突出した結果だというわけである。

ところで、実の電磁場は、ファラデー・ケージなどによって、その流れを遮蔽す

ることができる。しかし、非存在の“影の電磁場”は、実の世界に“存在”しているものによって遮蔽することはできない。だから、“影の電磁場”はファラデー・ケージを素通りしてしまう。

しかし、“非存在”的ものは“非存在”によって阻止されると考えられる。表の中の磁気シールドとは、そのような“非存在”的の遮蔽物のことをいう。

基本的には、虚数をくわえることによって、これまでのマックスウェルの方程式と鏡像関係が成立するような複素方程式ができるというご理解いただきたい。

鏡像関係にある実の電磁場と影の電磁場

実の電磁場	影の電磁場
a) 電場 E_1	磁場 iH_2
b) 電場 H_1	電場 iE_2
c) 電気単極 ρ_e	磁気単極 $i\rho_m$
d) 電流 J_e	磁流 iJ_m
e) 正方向への時間の流れ	負方向への時間の流れ
f) 電磁シールド可能	電磁シールド不可能 磁気シールド
g) 電磁誘導 $J_e \rightarrow H_1$	磁電誘導 $iJ_m \rightarrow E_1$
h) 物質とエネルギー的相互作用	物質と時間触媒的相互作用
i) 周波数 f	周波数 f
j) 輻射速度 c , 光速	輻射速度 c , 光速ただし非因果的

“影の電磁場”はすなわち“意識”そのものである。

たとえば、「私は自意識をもっている」ということができる。そして、現に、その自意識の命づるところにしたがって、このような文章を書いている。

つまりこの場合、私の自意識が外界の存在に影響を与えていいるということになる。

しかし、この自意識という意識は、その限りでは存在しているが、その実体を求めようとして、人間の頭蓋骨を切りひらいても取りだすことはできない。

このように人間の意識は、存在と非存在の二重性をもっていることになる。人間の意識と“影の電磁場”は存在論的に考えると、同一水準のものということができる。ただ、意識工学でいうところの“意識”は人間の意識だけに限定しているわけではない。人間の意識を含めた、あらゆる生命体、物質にも存在しているものが“意識”であるととらえているのである。

だからこそ、スプーン曲げは、人間の“意識”と金属の“意識”的相互作用の結果として考えられるのである。

このような考え方で、“意識”まで取りこんだ新しい科学である意識工学では、非物

質的な“意識”の領域は、もともと非因果的なものであるととらえている。

人間の意識については、心理学者のC・G・ユングによって、その非因果性が指摘されている。

因果とは原因があり、その結果があらわれるということである。この世界を因果律でとらえると、いっさいのものは何らかの原因から生じた結果であり、原因がなくては何ものも生じないと考えるわけである。

ところが、この世界には、この因果律で説明できない現象が数多くある。それを意識工学的な考え方では、この“意識”的存在からその非因果性を説明しているわけである。

念力について、複素電磁場理論から解明すると、ひとつは、影の正エネルギーの流入によって、あたかも熱が加わったと同じ反応を起こすこと。ふたつめは、逆に影の負のエネルギーの流入によって、熱を奪い冷却したと同じ反応を起こすこと。そして、このふたつの現象に同時にかかるのが、時間触媒作用である。

スプーン曲げの金属の断面に金属疲労が見られることによって、それは裏づけされている。影のエネルギーの時間触媒作用によって、実際に時間がそれほど経過していないにもかかわらず、長い時間が経過したと同じ現象が起こっているのである。念力によってカエルの心臓を止めたニーナ・クラギーナ夫人の場合も、影のエネルギーの時間触媒作用と見ることができる。時間触媒作用によって、カエルの心臓を老化させるのと同じような結果を引き起こすのかもしれない。

あるいは、心臓の動きを早くさせるのは、影のエネルギーによって、時間軸を縮めるのかもしれない。一分間に百回の心拍数とするなら、その現実の一分を影のエネルギーによって縮めることにより、回数を多くする。

すなわち、現実の一分間を、0.5分に縮めたとして、回数がそのままであれば二倍のスピードになり、逆に一分を二分にふくらませたとしたら、スピードは遅くなる。

ニーナ・クラギーナ夫人の場合、この後者のほうが、多分適切だろう。つまり、影の時間軸を作用させていると考えられるわけである。

ユリ・ゲラーの電子秤を動かす実験は、どのように考えればよいだろうか。

これは、そこにある物質の重力質量が“意識”的作用によって変化した結果、秤が上下したのだと思われる。

あるいは、スプーン曲げなどで曲がったスプーンや、折れたスプーンを科学的に分析すると、ごくわずかではあるが質量が減っていることがある。この場合、少なくなった質量の分の物質が、影の世界にテレポーテーションしてしまったと考えられる。

小さなスプーン一本の質量を減らすだけでも大変なパワーが必要なはずである。

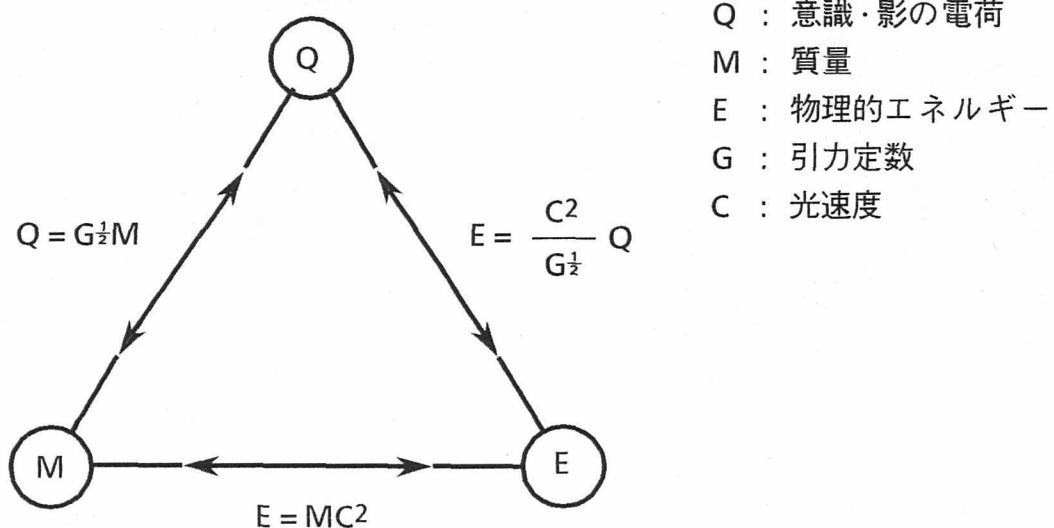
このように、超能力で起こるテレポーテーションのような現象は、ミクロの世界、たとえば微生物などの体内で元素転換がおこなわれたときに、質量が増えたり減ったりするという実験的な事実にもあらわれている。

意識工学では、このようなテレポーテーションが起こるのは、影のエネルギー

が、実のエネルギーに影響を与えて起こると考えるわけである。

そして、将来、このテレポーテーションを起こす装置を作りだして、それをコントロールすることが可能になれば、現代の輸送問題に解決を与えることにもなる。それは決して夢ではないのだ。なお、意識工学における意識・物質・エネルギーの変換関係図を示す。

意識・物質・エネルギーの変換関係



影の電磁場理論すべてが一目瞭然!

予知についてのメカニズムを理論的に解明してみたい。

遠隔視の実験からは、これまでのところふたつの重要な発見がおこなわれている。

ひとつは、被験者が実際に実験者がその光景を見る以前に、それを見てしまうという予知(プレコグニション)ということである。

あとのふたつは、被験者は、ときとして実際の光景と鏡像関係にある光景を見るということと、意識情報は夢のように非論理的であるということである。

遠隔視実験で、被験者の予知機能が確認されたわけだが、実際には、地震などの予知に対して、動物や植物の予知機能の例が報告されている。

それでは、予知のメカニズムとはどのようなものであろうか。

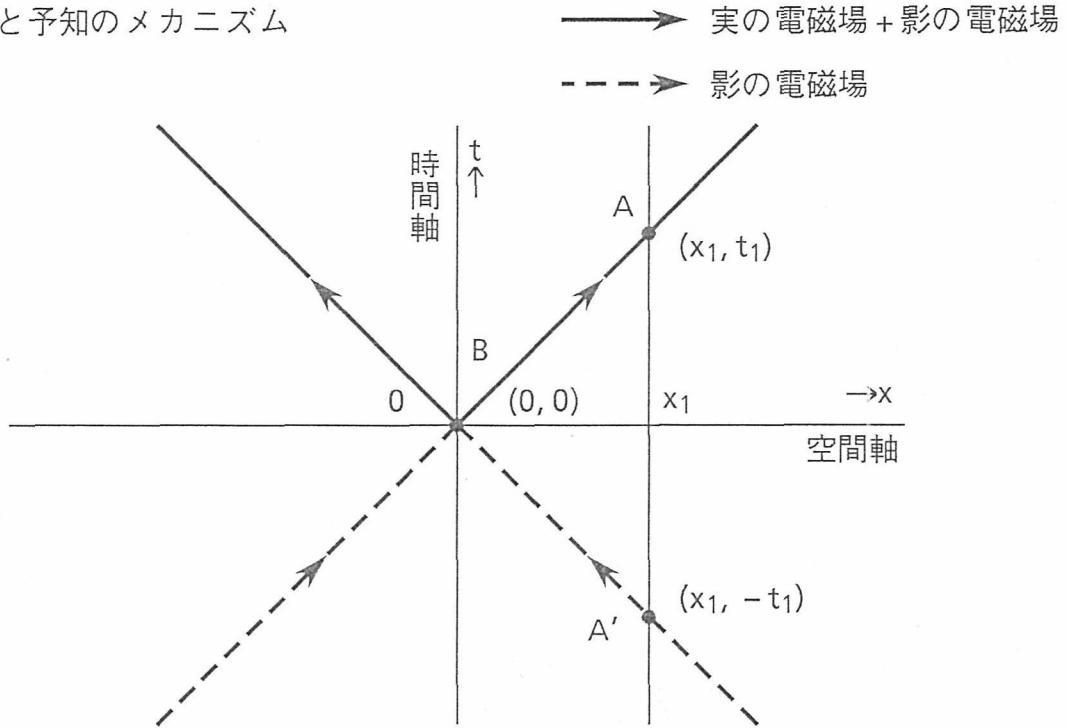
ちょっとむずかしくなるが、時空の座標軸を見ながら、この説明を読んでいただきたい。

たとえば、時空の(0, 0)点で、ある事件Bが起こるとする。この事件Bが起こったことが、空間的に x_1 離れている地点に届くのは、事件が起ってから t_1 時間経過したあとである。

つまり、A(x_1, t_1)点上で、はじめてBが起こったことを、ふつうの人は知ることになるわけである。

そのとき、“影の電磁場”を考えると、 $(x_1, -t_1)$ 点に、Bの事件についての“影の信号”A'が届くことになる。

複素電磁場と予知のメカニズム



つまり、時空の点 (x_1, t_1) では、事件Bが起こったことを知らせる“実の信号”Aが届き、それにより時間にして $2t$ 時間前に、 x_1 の位置では、“影の信号”A'が届くことになる。

この“影の信号”A'が事件Bの予知情報を提供することになるわけである。

もう少し具体的な例を当てはめてみよう。

たとえば、この図におけるBをケネディ暗殺事件としてみる。アメリカのダラスでケネディが暗殺されたことを、日本にいるわれわれがニュースとして知ったのは、事件が起きてから何時間後か何日か後であったろう。

この場合、アメリカとわれわれのいる日本のどこかという空間の距離が x_1 であり、事件の情報を知るまでにかかった時間が t_1 である。

すると、Aは同時にA'という情報ももたらすのであるから、 x_1 離れた距離を、もし東京としたなら、東京で、ケネディ暗殺事件の起こる以前の時間である $-t_1$ の時点でのこの事件について何らかの情報を得る人がいても不思議ではないわけである。

アメリカのジーン・ディクソン夫人がケネディの暗殺を予言したというが、このような“影の信号”を受けとったと考えれば、それもありうることなのである。

このように、“影の信号”が現実の世界との相互作用をおこなうと考えれば、それが動物や植物にも影響を与えることは十分に可能であろう。ナマズの地震予知機能などよくいわれていることであるが、この“影の信号”的しくみがもう少し研究されれば、現実的に、きちんとした予知が可能になるかもしれない。

ただ、“影の電磁場”すなわち、“意識”情報は、非論理的なものなので、それによって未来についての完全情報を得ることはできないと考えられる。

たとえば、指が痛む夢を見たとしても、どのように指をケガするかはわからないというように。だから、ディクソン夫人の、ケネディ暗殺のようなはっきりした

予知は、かなり強い影の信号が送られているということになる。

エーテルの正体は“影の電磁場”である！

AINSHU TAINは、光の媒質であるエーテルは決して確認することのできないものと規定した。

さて、意識工学において考えられているエーテルとは、すなわち“影の電磁場”的ことである。そして、この影の電磁場の特長は、その非物質性、非存在性にある。しかし、にもかかわらず、特定の時間、空間においては、すでに述べた触媒作用などのように、物質と相互作用するのである。

そして、意識工学における影の電磁場は、東洋哲学でいうところの“氣”に近い概念ということができる。

十八世紀の科学者L・オイラーは『ドイツの一公女への手紙』(大野他『異端の科学史』より・北大図書刊行会)のなかでつぎのようなことを書いている。

「一物体の細孔に含まれるエーテルが外界のエーテルよりも弾性が大きくなるか、あるいは小さくなるかにより、物体が二つの異なるふうに電気を帯びることはこれでおわかりいただけるでしょう。

これから二種類の電気が生みだされ、そのひとつはエーテルがより弾性的になる、すなわち、より圧縮されることによる増加した電気あるいは正電気と呼ばれているもので、もうひとつはエーテルがより弾性を失う、すなわち希薄になると減少した電気、あるいは負電気と呼ばれるものです」

そして、彼はガラス、こはく、硫黄などが電気を起こやすい物質であることを説明している。

このオイラーの説明は、現代の電磁気学が立入禁止にしている摩擦電気の問題について、物質的エーテルの立場から説明しているわけである。

意識工学の立場からは、摩擦電気の発生は“影の電磁場”がじょう乱して、“実の電磁場”的領域に突出してきたと考えられる。

影の熱力学

触媒現象ということから、熱力学のエントロピーの法則についても、これまでの法則とは異なったことが考えられる。

熱力学の第一法則は、「宇宙における物質とエネルギーの総和は一定で、決して創成したり、消滅するようなことはない。また、物質が変化するのは、その形態だけで、本質が変わることはない」というもので、これは「エネルギーの保存の法則」として有名である。

そして、熱力学の第二法則が「エントロピーの法則」である。

「物質とエネルギーはひとつの方向のみに、すなわち使用可能なものから使用不可能なものへ、あるいは利用可能なものから利用不可能のものへ、あるいはまた、秩序化されたものから無秩序化されたものへと変化する」

しかし、触媒現象を考えてみると、正触媒の場合は実際に周囲の温度が上昇しない

にもかかわらず、あたかも周囲の温度が上昇したのと同様に分子が活動する。負触媒の場合は、実際には周囲の温度が低下しないにもかかわらず、周囲の温度が低下したのと同じような現象が起こるわけである。すると、実の温度を上げたり下げたりしなくとも、温度が一定のままで、エントロピーの変化が起こりうるということである。

“意識”の作用による金属の変形、破壊の現象は、“意識”の時間触媒作用によって、このようなエントロピーの変化が生じたためであると考えられるわけである。それでは、熱力学の第一法則である「エネルギー保存の法則」はどういうことになるのか。

ここでは、“影のエネルギー”“影の熱量”まで取り入れた、「超エネルギー保存の法則」にまで拡張する必要がでてくる。

さらに、第二法則であるエントロピーは減ることはなくふえるだけであるという点であるが、すでにその破れについては電通大の佐々木茂美教授によって確認されている。

クラジウスによれば、熱的な孤立系としての宇宙エントロピーは、時間とともに増大しつづけ、熱平衡の最終状態で自由エネルギーゼロの“熱死”的な状態に達する。一方、時間を逆にたどれば、エントロピーゼロの状態があり、そこで宇宙が始まったというわけである。

ニュートン力学の世界では、宇宙のエントロピー増大の方向が、時間の方向の基準すなわち“時間の矢”と考えられている。

それならば、第二法則の破れめがまったく考えられないかというと、そうではない。ボルツマンの統計的な研究によると、エントロピーゼロという宇宙のはじまりに戻っていく可能性は皆無ではない。

このような時間が反転するような現象は、素粒子の世界では頻繁に起こる。ホルツマンによると、一立方センチの気体の分子がそれでもとの状態にもどり、時間反転現象を起こすには、 10^{10} 年 の年月がかかる。

だから、マクロの世界では、このような時間反転現象はきわめてまれだと考えられるわけである。

しかし、私はそうは考えていない。ことに生物現象においては、熱力学の第二法則はかなり日常的に破れているといえる。

割れたガラスのコップは元にもどらないが、たとえばトカゲのシッポなどはどうだろう。簡単に生えかわって元にもどる。

また、われわれが傷を負った場合も、それが致命傷でなければ、回復して元の状態にもどる。このような現象も“時間反転”といえるだろう。

われわれ肉体のエントロピー状態は、食物、物質環境のみならず、“影の状態”すなわち、その人自身の“意識状態”とか、集団の“意識状態”によって大きく変わってくるわけである。“意識”はこのように、時間と媒介としてさまざまなものに影響を与えるわけである。

私の理論が正しければ、私たちは、それこそ“影のエネルギー”“影の熱量”的ななかで生活していることになる。

東洋哲学でいう“気”に満ちているとは、すなわち、“影のエネルギー”で満ちているということでもある。